

## 札幌市立八軒西小学校の取組

### 1 研究のねらい

本校では、昭和 58 年度からこれまで 35 年にわたり、北海道大学に来ている留学生と交流会を行ってきている。交流会は夏と冬の年 2 回開催しており、今年度で 69 回目を迎えた。

#### ① 日常の授業の一貫として行う交流会

交流会に参加する留学生は、大学で半年の日本語コースの授業を受けている。その授業の一環として、子どもに自国の文化や生活の様子などについて日本語でプレゼンテーションを行う。また、子どもは、総合的な学習の時間を中心とした他国文化や自国文化を理解する学習として、実際に他国の人たちと交流しながら学ぶことのできる貴重な場となっている。

このように、交流会をお祭りのような特別な行事として行っているのではなく、教育課程に位置付け、日常の授業の一環として取り組んできていることが、交流会が 35 年続いている理由と言える。

#### ② 主体的に交流する姿を目指して

今年度は、より主体的に交流する子どもの姿を目指した。そのためには、子どもに相手意識や目的意識を明確にもたせることで、自分たちの国の文化や様子、自分の思いや考えを分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えさせ、自ら判断し行動できるようにする。

### 2 取組内容

**課題：留学生に自分たちの国の文化や学校の様子を分かりやすく紹介したり、留学生のことをよく理解したりするには、どのような手だてを工夫するとよいのだろうか。**

交流会は、一日日程で行われる。内容は、全校集会での歓迎セレモニー、学年での交流会、授業参観の三つである。学年での交流会では、留学生は子どもにプレゼンテーションを行い、子どもも留学生に質問をしたり発表したり、一緒にゲームをして楽しんだりする。授業参観では、子どもの日常の授業の様子を見てもらっている。

#### (1) 留学生との出会いの場である全校集会

全校集会は、児童委員会が中心となって進める。恒例となっている留学生への質問コーナーは大変盛り上がる。自分たちと同じアニメが好きなことを知ったり、「日本人はみんな親切だ」と言ってもらい、うれしく感じたりするなど、短い時間ながら留学生の声を聞いて親しみを覚え、日本のよいところを再発見する場にもなる。また、留学生から踊りを教えてもらって一緒に踊ったり、みんなで「小さな世界」を歌ったりするなど、お互いの心の距離が近づいた。

#### (2) お互いのことを伝え合い理解する学年交流

学年交流では、自分たちの学年・学級に配属された留学生からその国の紹介をしてもらう。3・4年生は、自分たちが事前に調べたことを基に「どのような時にこういう服を着ますか。」と質問をしたり、日本の生活の様子と比較して「日本では〇〇を食べるのですが、韓国では…」



と積極的に質問や感想を伝えたりする姿が見られた。これは、留学生がプレゼンテーションをしても、その国のことについて何も知っていなければ、質問をすることもできない。そのような状況では、感謝の気持ちが伝わらないため、子どもは、相手意識、目的意識をもって自分で詳しく知りたいことを分担して調べ、共有しようとする姿が見られた。

1・2年生では、英語活動で学習した「Hello. I' m ～. Nice to meet you.」「I like ～.」などの表現をゲームの中に取り入れ、自分から積極的に話しかける姿が見られた。また、留学生の国の挨拶の言葉を事前に調べ、それを文字で書いてもらったり発音の仕方を教えてもらったりもしていた。子どもは交流会後も、教えてもらった言葉を使って友達と挨拶し合っていた。

5年生は、ALT の先生に「自分も演奏を聞いてみたいと思うから、きっと留学生も喜ぶよ。」とアドバイスをもらい、器楽演奏を披露した。また、留学生へのプレゼントとして、社会科での学習を生かした「都道府県かるた」を作った。留学生はとても喜び控室に戻ると、早速みんなでかるたを広げて見ている。自分の学習と結び付けたものをプレゼントにするという工夫が留学生の心に届いた。

### (3) 日常の学習の取組を紹介する授業参観

6年生の授業参観では、2年間学習してきた外国語活動の経験を生かし、自分の国のことについて英語で伝えることにした。自分の発表を聞いて「ぜひ、行ってみたい。見てみたい。食べてみたい。」と思ってもらえるような内容にしようという目的意識のもと、どんな内容について伝えたらよいかを話し合い、ジャンルごとに分担して準備を進めた。ALT の先生に協力してもらい、他の国から来た人にとって興味をひくような内容であるか、考えた英語は通じるものになっているか、表情やジェスチャー、提示する資料は十分であるかなどを確認してもらった。当日は、留学生に「Good topic!」「Very interesting!」「Beautiful pronunciation!」「Nice performance!」「I' ll try it!」などとコメントをもらうことができ、子どもはとても嬉しそうな表情を見せていた。



## 3 成果と課題

### (1) 成果

日常の取組と関連・発展させる場として取り組み、今までよりも目的意識や相手意識をもたせることを意識したことで、子どもの交流会への取組がより主体的になり、満足感を得ることができた。また、高学年については、ALT をアドバイザーとして活用したが、伝える相手を ALT することも可能であると考える。相手意識が明確であることが表現活動においては重要である。

### (2) 課題

今後、カリキュラムの整理と見直しが必要である。それぞれの学年が、教科横断的な視点をもって取り組んできたことを今一度整理し、6年間を見通して系統的な積み上げになるようにすることで、より効率的で効果的な学習になる。また、カリキュラムを整理することで、子どもの学びの履歴を中学校へと引き継ぐことができるようにする。